

入来薪能と母

串田 久子



長野生まれの母が早稲田大学の在学中に恋愛結婚して、大学卒業後もずっと東京暮らしとなり、父の退職を期に父の郷里である鹿児島薩摩の入来町に根を下ろしたのは、たしか平成六年だった。今は薩摩川内市になったが当時は薩摩郡入来町といい、父の実家はその町の浦之名という地区にある茅葺門屋敷だ。

父の祖霊の地である古い武家屋敷の石垣が残った美しい町並みを母はたいそう気に入り、姑の世話をしながら愛する父と仲睦まじく暮らしていたのだが、入来町に住んで五年目の夏の終わりに、町お

こしのためだと言って、入来の清色城跡の小学校の校庭で薪能を自分を中心となつて開催してしまったのには、流石に娘の私も驚いたものだ。しかしながら母のその発想と情熱は何処から湧いていたのだろうかと考えてみると、突き詰めればそれは母の深い『愛』から生まれ出たのだといえると思う。

歴史ある茅葺門の家を愛し、古い石垣を愛し、清色城の名残があちこちにある小学校周辺を愛し、この素敵な町並みを是非全国に紹介したいという強い願いは、父への深い愛に繋がっていると私は思うからだ。

夫の郷里をこれほど愛して、町おこしをしたいと願う妻がいったいどこにいるかしら。本当に父は幸せ者だったと今更ながら思うのだが、その母は平成二十二

年に第七回の入来薪能を終えた翌年の春、残念ながら事故で急死してしまい、長年頑張つて続けてきた入来薪能も永遠に幕を閉じた。

長女の私は母に頼まれて薪能当日の司会をするために香川からいつも駆けつけていたのだが、母を支えてくださった町おこしに熱心な方々を上手に束ねて動かしていたのは、やはり地元で育った父の役割だったように思う。

このように両親の熱心な想いで実現化した薪能だったのだが、これは母の早稲田の同級生に観世家の娘の春江さんがいて母と交流があったからに他ならない。春江さんからのご紹介で、東京在住の頃から能の重要無形文化財指定保持者である若松健史先生に両親は謡曲を習っていたご縁で、若松先生がご自分の一座を率

いて入来で薪能を上演してくださったのだが、この観世流の能舞台は能には素人の私が観ても鳥肌の立つような心から素晴らしい荘厳な舞台だった。

夕暮れから篝火を焚き、美しい鼓の音が響く中を夢の世界から現れ出たような幻想的な舞が謡と共に舞台の上で繰り広げられていた。

太陽が完全に沈み、深い闇の中から篝火に照らされた『能』という伝統文化がこれほど厳かで心が洗われるものかどうか、私が入来薪能で初めて知った。入来薪能の開催からしばらくして鹿児島にも能楽堂が出来たと聞いた。この素晴らしい日本の伝統文化が鹿児島に根付き、いつまでも愛されることを天国の母は願っているのではないだろうか。

